

令和7年9月22日

浦添市議会議長 殿

総務委員会
委員長 濱崎 早人

総務委員会行財政視察報告書

令和7年8月6日から令和7年8月8日まで、委員会視察を実施いたしましたので、下記のとおり報告します。

記

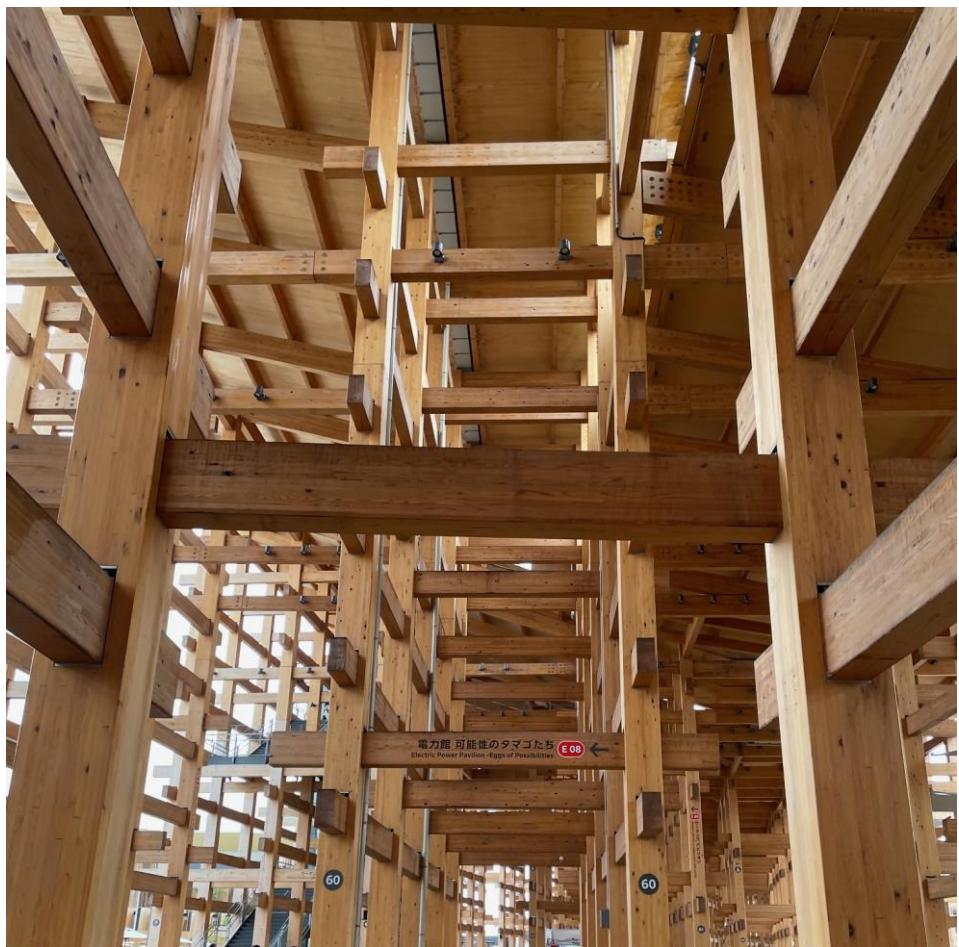
- 1 観察期間 令和7年8月6日（水）～令和7年8月8日（金）
- 2 観察場所 大阪・関西万博【日本館】、大阪府大阪市
- 3 観察項目 「循環型ものづくりによる環境に配慮した都市開発計画」について
「夢洲第2期区域のまちづくり」について
- 4 観察参加者 委員長 濱崎 早人 副委員長 豊元 ふき
委員 仲間 烈 委員 金城 大輔
委員 又吉 正信
- 5 調査内容 別紙のとおり

視察日	令和7年8月7日（木） 午前10時00分～正午12時00分
視察先	大阪・関西万博【日本館】 会 場 大阪市此花区 夢洲（大阪市臨海部） 開催期間 令和7年4月13日～10月13日 来場者数（想定） 約2,820万人
視察先の概要	
<p>大阪・関西万博は、COVID-19を乗り越えた先の、新たな時代に向けた国家プロジェクトである。この時代に開催される万博として「いのち」という原点に立ち戻り、自らと他者のいのちを意識し、そして自然界の中で生かされる様々ないのちに向き合い、世界が持続する未来を模索する場となる。転換期ともなるこの時代において、万博という場で世界が一つとなることに意義があり、いのち輝く未来社会のありようを共有することは2025年以後の世界の新たな一歩となる。</p>	
調査項目	
「循環型ものづくりによる環境に配慮した都市開発計画」について	
調査理由	
<p>大阪・関西万博【日本館】は、大阪・関西万博のテーマである「いのち輝く未来社会のデザイン」を開催国としてプレゼンテーションする拠点であり、当該テーマの具現化や、日本の取り組みの発信等を行っており、「いのちと、いのちの、あいだに」をテーマに、万博会場内の生ゴミを利用したバイオガス発電や、世界に貢献しうる日本の先端的な技術等を活用し、一つの循環を創出し、持続可能な社会に向けた来場者の行動変容を促している。</p> <p>浦添市の西海岸エリアの牧港補給地区（キャンプ・キンザー）の返還後の跡地利用については、近隣の市との連携を図りながら、県内総生産の向上、観光関連産業の成長、高度人材育成のための環境・基盤整備、交通インフラの整備など、多岐にわたる分野の振興・発展が期待されている。大阪・関西万博【日本館】への視察を通して、牧港補給地区（キャンプ・キンザー）返還後の跡地利用における持続可能な社会の実現に向けた取り組みについての調査・研究を行うことを目的とする。</p>	
調査内容	
<ol style="list-style-type: none"> (1) ごみから生まれる資源・エネルギーについて (2) 藻類とカーボンリサイクル技術を組み合わせたものづくりについて (3) 循環型社会の実現を目指したものづくりについて 	
考察	
<ul style="list-style-type: none"> ・ いのちと、いのちの、あいだにをテーマに根底にあるのは循環の価値を知ることが出来た。ごみを食べる日本館、バイオガスプラント。万博会場ないで出たごみが、微生物の働きによって分解されバイオガスとして再生される。SDGsを推進する関連のいのちのリレーのひとつであろう。ごみから水へ、水から素材へ、素材からものへ循環されている。それには多くの微生物（藻類）の分解により循環されているのにただ、無限の可能性に感心させられる。再生可能エネルギー、温暖化対策の切り札になることを期待したい。 ・ 日本館は「いのちと、いのちの、あいだに」をテーマにしたものだった。各テーマごとの入り口の場所には砂時計の形のモニュメントに映像が映し出されたものがあったのが印象的だった。藻類などが二酸化炭素の吸収やタンパク質の含有率などにおいて、とても有効だという事が分かった。微生物の分解の力や、発酵の力など自然界の中に、もともとあるものの力を再発見していくような内容で、自然界の中にある循環の仕組みをもっと現在の都市生活のシステムに活かしていく事を目指しているのだと感じた。 	
<p>日本館自体も建物が木材ベースで作られており、万博自体も木材をベースにした大屋根リングが象徴的な存在となっており、木というものの存在の大きさを感じさせられた。</p> <p>議会でも、海の藻類などが二酸化炭素を吸収することに着目したブルーカーボンを取り上げてきたが、今回の日本館の内容も活かしながら引き続き考えていきたい。</p>	

考察

- ・ 今回視察した大阪・関西万博「日本館」は、コンセプトを「いのちと、いのちの、あいだに」とし万博会場で出たごみを微生物の力で分解しエネルギーを生み出す「再生工場」だったとは！循環型ものづくりによる環境に配慮した都市開発の可能性を示す展示でした。
建築には万博のために植栽された木材が使用され、会期終了後は家具やスタッフのユニホームまで含めリサイクルされる設計で、一切の資源を無駄にしない精神が貫かれていました。
内部は「ごみ」から「水」へ (Plant エリア)、「水」から「素材」へ (Farm エリア)、「素材」から「もの」へ (Factory エリア) の3つの循環プロセスで構成され、それぞれ微生物や藻類など自然の力を活用した資源再生技術が紹介されていました。
特に、微生物によるごみの分解とエネルギー化藻類のスピルリナやボツリオコッカスなどの栄養・資源価値二酸化炭素から生分解性プラスチックを生み出し再び自然へ戻す技術など、廃棄物を「豊かな資源」に変える先進事例を体感しました。
また、日本古来の「丈夫に作らない」ことで循環を促すものづくり思想も印象的で、耐久性だけを追求するのではなく、役目を終えた後に自然に還る製品設計の重要性を学びました。
- ・ 本視察を通じ、循環型社会の実現には技術だけでなく、資源を尊ぶ価値観の共有が不可欠であると再認識しました。
浦添市においても、ごみ減量や資源再生に関する施策を、技術導入と市民教育の両面から推進することで、地域レベルでの持続可能な都市づくりにつながると考えます。
- ・ 循環型ものづくりにより環境に配慮した都市開発計画について日本館で視察を行った。
ゴミを食べる日本館として、万博で出たゴミを微生物の働きで水を生み出してさらには素材に替えて3Dプリンターでパビリオン内の椅子を作るというまさに循環を体現している日本館だった。
今後世界は循環型物作りにや環境に配慮した都市開発が進むと考えると、浦添市の都市開発についても作るだけではなく、循環という視点をしっかりと取り入れる必要があると考える。





視察日	令和7年8月8日（金） 午前10時00分～午前11時00分
視察先	大阪府大阪市
	人口 2,813,799人 (令和7年8月1日現在)
	市面積 225.34 km ²
	議員定数 81人

施設の概要

大阪市は、大阪府の府庁所在地及び近畿地方で最も人口の多い市であり、政令指定都市に指定されている。市域に多数の河川や堀を有し、かつては水運に支えられ経済と文化の中心的都市として発展し明治の頃には「水の都」と呼ばれていた。

昭和時代後期に至るまで日本経済の中心として機能し、またヒトやモノを惹き付けてきた都市であり、現在では、日本の商都として商業や国際観光などが盛んな都市である。

調査項目

「夢洲第2期区域のまちづくり」について

調査理由

大阪・関西万博跡地となる夢洲第2期区域（以下「第2期区域」という。）においては、開発面積が約50haという広大なエリアであるため、第2期区域のまちづくりの方針（マスタープラン）を示すこととし、令和6年9月から開始した「夢洲第2期区域マスタープランの策定に向けた民間提案募集」において、民間事業者からまちづくりについての提案を受け付け、令和7年1月に優秀提案2件を決定している。

令和7年度後半には、本マスタープランに沿って開発事業者の募集を開始し、開発事業者を決定することとしており、第2期区域のまちづくりの効果を、臨海部をはじめとした周辺地域に波及させ、大阪の成長・発展を先導する東西軸のニシの一大拠点の形成につながるよう取り組んでいる。

浦添市の西海岸エリアの牧港補給地区（キャンプ・キンザー）の返還後の跡地利用については、近隣の市との連携を図りながら、県内総生産の向上、観光関連産業の成長、高度人材育成のための環境・基盤整備、交通インフラの整備など、多岐にわたる分野の振興・発展が期待されている。夢洲第2期区域のまちづくりについての視察を通して、牧港補給地区（キャンプ・キンザー）返還後の跡地利用についての調査・研究を行うことを目的とする。

調査内容

- (1) 夢洲第2期区域まちづくりに関するこれまでの取り組みについて
- (2) 夢洲第2期区域まちづくりの現況について
- (3) 大阪・関西万博終了後の跡地活用方法に関することについて

考察

・ 今回行政視察を行った「夢洲第2期区域」の開発計画は、約50ヘクタールの広大な土地において、「夢洲第2期区域マスタープランの策定に向けた民間提案募集」における優良提案で決定された2件の内容を確認した。明確なテーマ性と複合的な機能を持たせ、国内外からの集客を図ることで共通していた点は、特にIRリゾートとの連携、テーマ性を持った大型集客施設、宿泊・商業・レジャーの複合化、夢洲でしか体験できない独自性が特徴であった。

優良提案1：車をテーマにしたミューズメントパークやモータースポーツ関連施設、ラグジュアリーホテルを組み合わせ、エンターテインメント性の高い国際集客拠点を目指す構想。

優良提案2：特徴的なラグジュアリーホテルやウォーターパークを核に、駅前商業機能を加え、観光・娯楽・買い物・宿泊が夢洲内で完結する「完結型リゾート都市」構想。

明確なテーマ設定と複合機能の組み合わせは、跡地利用を単なる再開発に留めず、地域全体のブランド力と経済効果を高める手法として有効であると考えられる。

浦添市西海岸の開発においても、夢洲のように「テーマ設定」「複合機能」「完結型ゾーン形成」を意識することで、地域の魅力と経済効果を高められる可能性があると思いました。

考察

- ・ 大阪・関西万博の跡地となる夢洲第2期区域マスタープランV e r . 2 . 0 (案) が2025年6月に策定された。リゾートとシティの要素を融合させた空間を形成しスマートな取り組みによってまち全体の連携を高度化し国際観光拠点機能の強化を図り土地利用の方針として第1期区域は統合型リゾート (IR)

を中心としたまちづくり、第2期区域は万博の理念を継承したまちづくり、第3期区域は長期滞在型の街づくりその意義や理念を活かしたまちづくりを目指すとの事。本市もキンザー跡地の土地利用の方針を明確にし、地権者と早急の交渉を行うことが喫緊の課題。

- ・ 約50haの第2期区域について、マスタープランの説明を受けたが、4月に1.0 (案) 、6月に2.0 (案) が出たということで、今回は2.0 (案) をもとに話を伺った。今後もバージョンが更新されるという事で、大屋根リングの取り扱いがまだ確定しておらず、その活用も入れ込んだものがバージョン3.0になると考えられる。

実際に現場で大屋根リングを見たが、とても存在感があり、万博全体を象徴する建物なので残した方がいいと感じた。第2期区域のまちづくりについても、国際観光拠点にしていくという構想なので大屋根リングだけでも十分観光の目玉になると感じた。

現在、第1期区域でのIRの整備が始まっている、2030年の開業を目指して工事が進んでいく。私の方からは第2期区域も2030年に向けて整備を進めるのか質問したところ、第2期区域についてはマスタープランも固まっておらず、事業者も決まっていないことから2030年には間に合わないとの事だった。現在、民間事業者からの提案を受けている状況だが、大手ゼネコンや不動産ディベロッパーが代表企業となっており、事業者が決まれば市は土地を売却して事業してもらうとの事だった。

キャンプキンザーの跡地は個人地主が大部分なので、売却して事業を行ってもらうのは難しいと感じるが、浦添市だけでできる事業ではないため、政府や民間事業者の協力が必ず必要になる。夢洲のまちづくりが今後どういった形で進んでいくのか引き続き注目していきたい。

- ・ 夢洲第2期区域のまちづくりについて視察を行った。

夢洲第2期区域は令和7年8月現在行われている大阪・関西万博会場であり今後の跡地利用方法を確認した。

特に大屋根リングについてはパブリックコメントを実施したりと府民・市民の意見も取り寄せながらの今後の計画になるとのことだったが、ランニングコストの問題などもあるようだった。

人の流れの課題もあり現在は1つの路線でしか夢洲地域に入ることが出来ずに今後他の路線からも入れるようにしていくことが必要とのことだった。

視察後にこの路線が止まり夢洲地域から出られない現状も起きている。

跡地利用方法については現在も民間企業の提案も受けながら模索している段階で今後浦添市に関わるGateway2050等の大きな事業も待ち受けているので、引き続き勉強をする必要があると考える。

- ・ (1) 夢洲第2期区域街づくりに関するこれまでの取り組みについて

大阪府・大阪市では、大阪港に浮かぶ約390haの埋立地「夢洲」において経済界とともに策定した「夢洲まちづくり構想」(2017年8月策定)及び「夢洲まちづくり基本方針」(2019年12月策定)に基づき、都心部にはない海に囲まれた立地条件や広大な土地を最大限に活かした国際観光拠点の形成に向けた街づくりを進めている。

また、夢洲第2期区域においては、IRと連携を図りながら、観光外周道路や鉄道(コスモスクエア駅～夢洲駅間)など、土地利用に必要なインフラ整備も進めている。

- (2) 夢洲第2期区域まちづくりの現況について

「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに、国家プロジェクトである2025日本国際博覧会が開催され、夢洲に国内外から多数の来訪者が見込まれています。

<交通アクセス>

都心や周辺都市との高速道路ネットワークが整備されており、交通至便性が高く、近畿圏には、関西国際空港、大阪国際空港(伊丹空港)、神戸空港の3つの空港が立地している。

<周辺施設>

夢洲周辺の大坂臨海部には、ユニバーサル・スタジオ・ジャパン、海遊館などの観光資源や、夢洲には野球場・アリーナなどのスポーツ施設が立地している。

(3) 大阪・関西万博終了後の跡地活用方法に関することについて国際観光拠点にふさわしい大規模で、統一されたエンターテイメント機能やレクリエーション機能の導入を図ることで国際観光拠点の強化及び更なる集客

大阪が強みを有する産業(健康・医療産業など)や研究機関の研究成果などそのデータを活用した様々なプロジェクトを創出する、万博理念を継承する取り組みを展開など、令和7(2025)年度後半には、本マスタープランに沿って開発事業者の募集を開始し、開発事業者を決定する、臨海部をはじめとした周辺地域に波及させ、大阪の成長・発展を先導する東西軸の一大拠点の形成につながるよう取り組んでいく。

本市のキャンプキンザー返還の跡地計画において、マスタープランの策定に向けて民間提案募集の実施等でゲートウェイ構想に繋げてほしいです。

